

タイトル：

『個別化医療時代の動脈硬化予防・脂質異常症治療：動脈硬化リスク因子としての高トリグリセライド血症』

金沢大学附属病院循環器内科 助教 多田 隼人 先生

講演要旨：

そもそもあらゆる疾患は遺伝的要因と環境要因から発症進展するが、脂質異常症や冠動脈疾患はその遺伝率は 50%以上であることが知られている。従ってこのような疾患の診療を考えるうえで、遺伝的要因を考慮することは非常に合理的であると思われる。

一方で冠動脈疾患に対する LDL-C 低下療法は現状広く普及していると言えるが、逆に普及しすぎて冠動脈疾患患者にスタチンを投与すれば脂質に対するケアは終了、という感覚が蔓延していることを懸念する立場から、今回遺伝学的なアプローチにより極端な表現型を呈する高脂血症あるいは低脂血症の知見から、LDL-C もトリグリセライドも同じように動脈硬化性疾患に対してはいわば悪であることが示された。

冠動脈疾患におけるスタチンのような言わば **one-fits all** の考え方に、今回は警鐘を鳴らし、脂質低下療法においても遺伝学も加味した丁寧な個別化医療を目指す、という一見地味だが非常に重要かつ先進的な考え方が提示された。

また、疫学研究、臨床研究、遺伝学的研究からもトリグリセライドは介入すべき、動脈硬化の **causal factor** であることが強く示唆されているにもかかわらず、実際には未治療症例がまだまだ多いということ、その介入の選択肢の一つとして EPA 製剤も有効である可能性が高いことが示された。

(福井総合クリニック 佐竹 一夫)